平成26年(2014)
阿づまの光
1月号・Januaro

五代教主作 灰釉茶盌 銘「みろく（五六七）」
［月宮宝座土・本宮山松釉］

題字出口直日

通巻第538号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

主の神の御旨かしこみ地の上に
神国をたつる道はこの道

出口王仁三郎聖師

み教えの光が東都を照らす

東京宣教センター長 浅田秋彦

開教百二十二年甲午の年、明けましておめでとうございます。

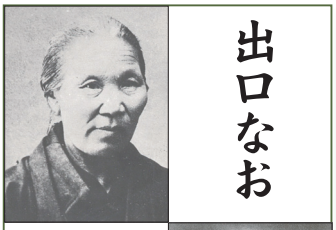
今年の教団方針の主旨は「みろくの世への実践」であります。その眼目は、大本のみ教えを混迷の世界へ宣べ伝えることです。さらに、宣教とはみ教えを伝え、神さまの門戸へご案内すると示されています。これは、「みろくの世実現」「み救い」の神業を行うことであります。信徒は、日々み教えを実践し、神さまのお光をいただきき、誠意と親切と忍耐を尽くして、信仰の喜びを家の内に向かって深く、外に向かって広くお伝えすることが使命であると示されています。つまり、み教えの実践リーダーとして活動することであります。

神諭には「一人なりと早くみろくの世の教えに基づかんと、大変困ることが差し来たりて居るから、末法のやり方しておりたら、びくとも出来んようになりて来るから、一人でも熱心の信者の人は、知らん人民に言い聞かしてくだされよ」と諭されています。これは神さまのみ心であります。

昭和四十五年、三代教主さまは大本東京本部の竣成にあたり「首都における神業が進展いたし、み教えの光が東都を照らし、日本をあまねく照らしますことを念願いたす次第であります」と述べられ、首都圏宣教の使命をお示しくださいました。

今、東京宣教センターでは「大本公開講座」、「常設大本講座」、各主会では「生きがい講座」などを通してみ教えの光を外に広く、内に深く伝えるとともに、神さまの門戸までご案内する「救い」の神業を鋭意進めているところです。昨年十一月、大本開祖大祭後に、道院からの大本東京本部に下付されたフーチ（自動書記による神託）は、奇しくも『廣化世人』でした。

私たちは力を合わせ、祈りと実践を通して、神さまのお光を多くいただきくとともに、延いては首都圏から「み教えの光」が東都を照らし、日本をあまねく照らす年になるよう、決意を新たにする次第であります。どうかよろしくお願い申し上げます。



出口なお

王仁三郎の世界を語る

大本公開講座

芸術は宗教の母なり

～信仰即生活即芸術～

耀盌『天国廿八』

講師 田辺謙二（たなべけんじ）
（開教 120 年記念事業事務局主幹）

真善美愛を目指す

大本の聖地の一つである天恩郷（京都府亀岡市）に万祥殿という神殿があります。この神殿は、日本でここにしかないという、一つの特徴を備えています。それは、神殿の中に能舞台があることです。

社殿や境内に能舞台が併設されている形は、広島の厳島神社や東京の靖国神社など他にもたくさんありますが、神殿内に能舞台があり、茶室も併設されているのは、この万祥殿だけです。これは、出口直日・三代教主の設計によるもので、本日のテーマである『信仰即生活即芸術』が一体となった象徴的な姿といえるでしょう。

この信仰と生活と芸術が深く関わり、一体のものとして説かれていることには大きな意味があります。三つが目指すものは『真善美愛』です。神さまが実現を預言され、私たちが目指す世界は『地上天国』であり、『みろくの世』ともいいます。その『地上天国』というのは、『真善美愛』が、実際の形となって現れた世界だと言ってもいいと思います。

大本では、その『地上天国』を築くために、まず自分自身の内面に天国をつくることが、一番重要であると、教えられています。その内面を向上させ、生活の質を高めるために重要な要素の一つが、芸術と言えるでしょう。

パリでの作品展と茶席

大本と芸術を語るとき、必ず紹介されるのが、『大本海外作品展』です。一九七二年から三年間、欧米六カ国十三会場で開催され、二十五万人もの来場・鑑賞者がありました。

この作品展開催のきっかけを作った人が、パリのセルヌスキー美術館のV・エリセーエフ館長（当時）です。一九七一年十月、大本歴代教主の作品を見たいと、同館長は大本に来苑します。作品とそれが生まれた聖地をご覧になり、非常に驚嘆されました。

その時館長は、次のような言葉を残しています。

「印刷物や写真で見た、私のイメージは間違っていなかった。これらの作品の展覧会をパリで開催すれば、たいへん素晴らしいことになる。ぜひ、私の美術館でやらせてほしい。ヨーロッパでは、宗教といえば、悲しみを与えるものという観念がある。しかし、この大本の作品のどれもが、喜びに満ちあふれている。宗教は人々の心に、喜びを与えるものであることを、この作品をとおして、ヨーロッパの人々に知らしめたい」と。

もう一つ館長の心を動かしたのが、大本の茶席でした。茶室に入席し、そこで使われる作品（茶道具）をご覧になり「ぜひパリで茶席を実現してほしい」と依頼され、パリの作品展会場で、特設の茶席を催すことになりました。

着物姿で薄茶を点て、来場者に差し上げる中、エリセーエフ館長自らが日本の茶道の説明をし、その茶席は大好評を博しました。それ以降、作品展の全会場で茶席が設けられることになります。

パリ市文化局博物館部長のウゲット・バイエ女史は、「自分は初めて日本のお茶席に入ったが、とても静かな雰囲気で、ヨーロッパでは、どこに行っても絶対に味わえないものだ。とても素晴らしかった」とコメントを残しています。

茶道は総合芸術であるといわれます。茶室には書をはじめ、陶器、漆器、竹工芸、金属工芸、そして建築や庭園があります。そこには日本の伝統文化が集約されています。

茶道は万人の感性に訴え、国や人種を超えて通用するということ、それをパリでの「茶席」が実証しました。

大本海外作品展（パリ・セルヌスキー美術館）

耀盌顕現

出口王仁三郎聖師は、早くより『芸術は宗教の母』『信仰即生活即芸術』を説きます

が、教団全般に浸透するには時間を要しました。文化芸術活動を強く推奨し、教団に具現し「大本の教風」といわれるまでの指導を継続したのは三代教主でした。

三代教主の文化芸術の原点となる場所が、兵庫県の竹田（朝来市）にあります。大本で最初に正式な茶室が建てられたのも、この竹田でした。

今でこそ「耀盌」という名は世に知られ、王仁三郎聖師作の楽茶盌として定着していますが、聖師が茶盌を作り始めたころは、まだその芸術性は認められていませんでした。最初に茶盌の美しさを認めたのは、三代教主でした。

聖師の楽茶盌が世に認められるようになったのは、この茶室での出来事が発端でした。三代教主が備前焼きの人間国宝・金重陶陽氏、弟の素山氏を招いた時のことです。三代教主は茶室に五十個ほどの茶盌を並べ、「どれでも好きなものを一つ差し上げます」と金重兄弟に言われました。

陶陽氏の目に入ったのは、素山氏の近くに置かれた『天国廿八』という茶盌でした。陶陽氏が先にその茶盌を手に取ると、素山氏は「先に取られた！」と思ったそうです。同時に三代教主も「私が一番良いと思っている茶盌を、選んでいただきとても嬉しいです」とおっしゃいました。五十に余る茶盌の中で、三代教主と金重陶陽、素山兄弟の美的感覚が一致したのです。

後日、金重陶陽氏宅を訪れた、陶芸評論家の加藤義一郎氏が、王仁三郎聖師のこの茶盌を目にして感動し、一晩かかってふさわしい名前を考えました。そして生まれたのが、星が輝く盌という意味が込められた〝耀盌〟でした。

みろくの世の型

茶道にはお茶事という、炭点前、懐石（料理）、濃茶、薄茶と続く、言ってみれば正式な和のフルコースがあります。三代教主は茶事について、次のように示しています。「私がお茶事をさしていただくよろこびというのは、ああいう清らかな高い楽しみを、より多くの人に味わっていただきたい、という念願にあります。世間では、一ばんにお茶事といいますと、たいていはお金持ちとか、有閑人のもてあそびに使われているようにしかとられていません。私たちのやらしていただいているお茶事は、それらとは、まったく別なものであります。口はばったい事をいうようでありますが、私は『みろくの世の型』をさしてもらっていると信じています」

「みろくの世の型」としてのお茶であり、理想世界に少しでも近づくための実践として茶道を奨励し、それが大本の教風を培い、それぞれの生活にも反映されています。

本当のオモテナシとは

オモテナシが一躍有名になっていますが、本当のオモテナシとは、これもまた『真善美愛』に叶ったものであり、真剣に相手のことを思うことが基本のように思います。

ある正月の茶席で、三代教主が海外から来た女性二人を招待された時のことです。その客人は、日本の正式な茶室に通されたということで、ルールどおりに正座をして、茶席の主人が来るのを待っていました。

ところが、三代教主は茶室に入られた時、まず大きな声で『A HAPPY NEW YEAR』と声を掛けました。さらに「お楽にしてくださいよ。どっこいしょ。私もアグラをかきましょう」と言って、そこであぐらをかかれたのです。これで、座はいっぺんに、打ち解けました。

しかし、記録には『顔をしかめながら、あぐらをおかきになる教主さま。拝見したところちっともお楽そうではありません』とあります。三代教主は着物を着ていました。三代教主にとってあぐらをかくというのは、ちっとも楽であるはずがないのです。

このことが教えてくれることは、何でしょうか。オモテナシ、相手を心から思いやるということです。外国の女性が茶室で緊張し慣れない正座をしているなか、ごく自然に自らがあぐらをかいて、その場の緊張を解き和やかな空気にされたわけです。

また三代教主は『お茶の本当の姿は、愛の精神から、体験的に生まれたものであると考えられます』という言葉も残しています。

どのような方が来られても、相手への愛を根底に持ち、作法を知らない方であっても、気持ち良く一服のお茶を召し上がっていただく。それがオモテナシの心に通じるものと言えるのではないでしょうか。

大本開祖は大茶人

三代教主の言葉に、開祖こそ『たぐいまれなる大茶人であったと、わたしはいつも敬っています。茶でいう〝和敬静寂〟の気がただようていました』とあります。

幼少の頃から開祖のそばで寝起きし、共に日々慎ましい生活を送られていた三代教主は、開祖がお茶の作法を習うどころか、実際に抹茶を召し上がったこともなく、茶道自体を知らないことをご存知でした。しかし、開祖の日常から漂う香りと雰囲気が、〝和敬静寂〟そのものであったと示されているのです。

千利休は「和敬静寂」を茶道の本体と説いています。それは信仰、生活、そして芸術にも通じる大事な柱と言えるのかもしれません。

信仰と生活と芸術を

本日は、芸術の中でもお茶を話題として述べてまいりました。

私自身は茶人でも芸術家でもありません。しかし大本本部という大変恵まれた環境の中で、色々な素晴らしい空気に触れさせていただいてきました。それは本当に幸せなことであったと感謝しています。なかでも正式な茶席（聖師・二代教主を偲び掛けられる月釜）に、毎月のように入席させていただくたびに、その有り難さを思います。

お茶は分からなくても、その場の澄んだ清らかな空気、和やかな会話、床のお軸をはじめとする諸道具の美しさは、自分なりに感じさせていただけます。そして席を終えたあとの清々しさは、なんとも言えません。こうした物に接することにより自らの内なる世界も自然に浄化され、より天国的な世界に少しずつ近づかせていただけるのだと思います。

言葉にするのは簡単ですが、信仰、生活、そして芸術が一体となった姿を自らの中に、家庭に、さらに地域社会に築いていくことは容易なことではありません。しかし少しでもそれに近づくための日々でありたいと願いながら、講話を終えさせていただきます。

掲載文は、平成二十五年九月十八日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は十二月八日、午前十時三十分から執行され、三百二十人が参拝した。

祭員は関東教区各主会青年部員、少年少女祭員は山梨主会の松浦和日くんと、片桐詩音梨さん、伶人は宮咩会関東支部、大本神論拝読は、東京主会青年部の貴堂文奎さんが務めた。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長が挨拶に立ち、一年を振り返り、どれだけ神さまの門戸にご案内できたか互いに省みるとともに、明年も心新たに「外に広く、内に深く」知人・友人・家族に大本のみ教えを伝えることの重要性を述べた。

引き続き、「食の安全」を守るために（食・農活動）と題して、浅田センター長による月次祭講話が行われ、〝天産物自給〟や〝天地のご恩に報いる生活〟など、正しい食・農のあり方を実践し、普及する活動について、お示しを紹介しながら講演した。

次いで奉納行事に移り、埼玉主会の皆さんによる愛善歌『栄光』が、藤本光総務管理課長のギター伴奏で斉唱された。

直会後には、中村社中による添釜がかけられ、参拝者は一服の薄茶に師走の慌ただしさを忘れ、ご神徳に浴した。

無事祭典にお仕えし
思わず笑みがこぼれる

埼玉主会の皆さまによる
愛善歌『栄光』

出口なお・出口王仁三郎の世界を語る

第百三十回大本公開講座『出口なお・出口王仁三郎の世界を語る２０１３』は、十二月十八日午後七時から、港区新橋の航空会館において、春風ふくた師匠（漫才師）を講師に迎え「泥田に咲く蓮の花に学ぶ―苦しみが救いを生む―」と題して開催された。参加者は十九人（内、一般二人）。

講座では体験談を元に、「人生には苦しみもあるが、多くは〝こうあってほしい〟と思い詰める心から生まれる。しかし、思い通りに行く人生などなく、善きにつけ悪しきにつけ、他力によって生かされている。大本の教えは、人生の羅針盤である」と、優しい口調で聴講者の笑いと涙を誘った。

自分を認めてもらいたいなら
相手を認めてあげることです

今年も開催します

大本東京本部・東京宣教センターでは、首都圏の対外宣教活動および愛善運動を積極的に推進し教勢を拡大することを目的として、今年も「大本公開講座」と「常設大本講座」を開催します。有縁の友人・知人へのご案内をお願い申し上げます。

大本公開講座「出口なお・王仁三郎の世界を語る2014」

開催日時　毎月第３水曜日　午後７時～８時３０分
場　所　航空会館（港区新橋１丁目１８－１）
参加費　１，０００円

常設大本講座

開催曜日　毎週、月・水・金曜日
午後の部　２時～３時３０分
夜間の部　７時～８時３０分
※ 毎月第３水曜日の「夜間の部」は休講
期　間　平成２６年１月１３日（月）から１２月２２日（月）まで
場　所　大本東京本部・８階ミーティングルーム
参加費　無料
内　容　月曜日『神と人の関係』
水曜日『霊界の実在』
金曜日『人生の目的』

東光苑祭典・行事予定

1月

1日（水）午前7時00分執行
新年祭・年賀交換

1日（水）～3日（金）
年賀交換

7日（火）午前10時30分～
東光苑七草粥

12日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・成人式典

18日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2014」
講題　大本の神示と世界の将来
～出口なおの帰神とお筆先～
講師　浅田秋彦（東京宣教センター長）

19日（日）午前10時30分執行
聖師毎年祭（66年）

2月

3日（月）午後6時30分執行
開教百二十二年節分大祭遥拝祭　二代教主・四代教主聖誕祭

9日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・豊年祈願祭・市杵島姫命例大祭

19日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2014」
講題　救世のプログラム
～出口王仁三郎と霊界物語～
講師　斉藤泰（教学研鑽所事務局主幹）

22日（土）23日（日）
教本3級認定講習会